

課題名 神居古潭地区におけるエゾシカ食害の現況把握と食害防止事業
の評価

機関名 (株) 森林環境リアライズ 所属 業務部 氏名 山口 信一
機関名 上川中部森林管理署 所属 業務第一課 氏名 坂後 浩

1. 課題を取り上げた背景

今日の北海道内におけるエゾシカ被害は、規模・金額共に甚大で、大きな社会問題の一つです。また、各地の禁猟措置が施されている林分にエゾシカが逃げ込む『学習効果』の問題も顕著化しています。

そのような中、鳥獣保護区である神居古潭地区において、4,5年前から嗜好性樹種に対する樹皮剥ぎが相次ぎ、順次樹幹保護シートを施工してきたところです。

しかし、樹幹以外の被害状況や、保護シートの特徴（耐久性・施工難易等）、そして保護シートの効果等を詳しく検証することなく、被害木の発見に際し対処療法的に保護シートを施工してきました。

そこで、順応的管理のポイントとなる『PDCAサイクル』を適用し、今までの施工やその効果をCheckし、Actionの段階で効果的・効率的な被害防除手法を考案することで、エゾシカとの共存を目指すことが重要です。

2. 取組みの経過

神居古潭地区でエゾシカ被害が顕著化した4年前の平成18年度から平成21年度にかけての毎年度、樹幹の直接保護を目的に、嗜好性樹種に保護シート（商品名：ザバーン）を施工してきました。

そこで今年度の本課題において、①施工後の樹木食害状況等の把握、及び②保護シートの現況把握、を行い、今までの効果等を検証することとしました。具体的に①について、保護シートにより食害被害木の発生を抑制できているか、という視点で毎木調査と林床植生調査を、また②について、被害防除方法は適切か、という視点で施工木の選木や保護シートの耐久性についての検証を行いました。

3. 実行結果

毎木調査の結果、保護シート施工木の枯死は発生しませんでした。また、新規の食痕はハイイヌガヤしか確認されませんでした。保護シート未施工箇所も含めた調査地全体を、胸高直径階別にみると、食害が見られた樹種であっても、30cm以上の大径木に対する食害は確認されませんでした。それ以下の小径木では、ノリウツギやシナノキ等の嗜好性の高い樹種に食害が多くあり、枯死している個体も確認されました。

林床植生調査の結果、クマイザサの生育の有無により植物種数が異なり、クマイザサが生育している箇所では、計19種の植物種の生育が確認され、ハルニレ等の高木種も生育していました。そして、クマイザサの全稈数に対する死稈数の割合は、37%でした。クマイザサが生育していない箇所では、計25種の植物種の生育が確認され、木本種の稚樹が多くなりますが、エゾシカ食害も同時に増えていました。

保護シートの現況調査の結果、サンプル抽出した過年度施工木約170本のうち、施工後の食害木は1本のみでした。年度別状況では、平成18年度施工木の47%に、保護シートが落下または飛散の確認がありましたが、その他の年度では見られませんでした。

4. 考 察

嗜好性の高い樹木の樹幹に対し保護シートを施工することは、樹皮剥ぎ被害の防止には効果があることが分かりました。但し、高木種を対象に施工してきましたが、嗜好性の高い低木種も被食されており、多様性保全の観点から、低木種の保護も必要であることが示唆されました。しかし、最近の食害は低レベルのものです。保護シートを施工することによるシカの『警戒効果』を示唆する報告がなされており、積極的な保護シートの施工を進めるより、今後の食害動向を注意深く見守り、再び被害が拡大する傾向を示し始めた際、即座に対処することが大事であると思われま。保護シートの耐久性として、4年程度の経過で落下等が発生するため、その辺りで保守等のメンテナンスを行う必要があります。

今後は、鳥獣保護区全体の森林被害状況の把握を行い、周辺のエゾシカ個体数の動向を注視しながら、当地区における森林保全のあり方を考えていく必要があります。